

一葉して

松岡隆子

流れては水透きとほる蛍草
降る雨に音なき秋の百日紅
庭石の一つ一つに秋の声
石段の途中で話し秋深し
人ごゑも草の穂絮も風に乗り
身のどこか痛き秋蟬鳴きつのも
曼珠沙華しづかな白を燃えたたす

一葉して一葉して水動かざる
幾つ目の橋かは忘れ秋深し
忘れしはカンナの赫きせるにしぬ
木瓜の実の歪をかぞへ貌昏るる
ある時の空青すぎる秋思かな

眸先生の句集は出版される度に当時の「俳句」や「俳句研究」、「俳句朝日」等で特集された。『矢文』の時は平成6年の「俳句研究」10月号のシリーズ平成新俳壇で「岡本眸の世界」が特集された。〈眸論〉の執筆者は関森勝夫、神蔵器、斎藤夏風、宮津昭彦、大井雅人、岡本高明、西村和子の7氏。その中の大井雅人氏の論考が掲載された俳誌「とちの木」（川崎雅子代表）10月号が送られてきた。〈点したる灯が落ち着いて梨剥き出す〉など10句の明りの句を揚げた眸論は魅力がある。今また眸俳句が広く読まれていることは嬉しい。